四、モダニズムと民衆

一　パリの田舎者

僕は以前からヨーロッパに憧れて、フランスへ行くことにも憧れていて、やっぱりそれは、日本よりいろんな点で進んでるんでないか。何が進んでるかというと、フランスでは個人が確立されていて、日本じゃなんとなくベタベタベタと、いろんなことになってるんじゃないか。自分自身を考えてもそうですし、何かどうもその辺がおかしいんでないか。やっぱりフランスって、進んでるんじゃないかなァ、という幻想をやっぱり持ち続けていたんです。フランス革命は実はこうだ、こうだったといっても。

で、僕はそれを確かめてみようと思って、去年七月の初めから九月の末まで約三ケ月間程ですね、ひとりで借金して行って来たんです。フランスへ。

そうするとやっぱりですね、自分のもっていたモダニズムっていいますか、そういうものがモロにあらわれますね。ひとりで行って、まったく知らない土地ですから。頼る人も誰もいないんですから。

まず飛行機はいいですわね。飛行機の中というのは、日本人も半分位乗ってますから。で、いろんなことを日本語でしゃべれます。僕もフランス語をだいぶ勉強して行ったつもりなんですけども、向こうの空港に降りて、皆からちょっとテンポ遅れてバスに乗るとですね、日本人僕ひとりだけなんです。誰見てもフランス人なわけです。にわかに寂しくなるわけです。

そのうちにですね、僕の隣に、ブロンドのですね、美人でしかもグラマーな、ブルーのワンピースのよく似合う、そういう若い女性が坐ったんです。そしたら、ドンとその女性が坐った拍子に、僕の上着の裾がグッと尻の下になったわけです。僕はそれをいつ引っ張り取ろうかと思っているんですけども、仲々引っ張り取れない。なんとなく圧倒されちゃって。その圧倒されたというのは、これはつまりヨーロッパ・コンプレックスなんです。最後の最後までだめなんです。

僕は日本でも仲々ちょっとできないときがあるんですけどね。相手のこと気にして、なんとかむず痒がるんでないかなァ、とかね。だからむず痒がってちょっと尻を上げた隙に、パッと引っ張るのは普段でもやるんですけども。だけどもフランスへ行ったら、それをいつやればいいかなァ、といろいろ考えているうちにだめなんですね。結局バスが終点に着くまでそれはできなかったわけです。

それから、今度はホテルへ行くでしょ。ホテルへ行ったら、あんたの室は二階の十八号室だ、というわけです、おばさんが。フランスでは、一階は一階と勘定しないわけです。だから二階が一階で、三階が二階なんです、フランス語では。だからホテルのおばさんが、あんたの室は二階の十八号室だよ、というでしょ。そしたら日本式にいえば、フランスで二階ということは日本では三階のことだから、と思ってエレベーターに乗るわけです。

エレベーターの戸を閉めなきゃいけないでしょ。ところが、ボタンどこ押していいのかわからない。そこでビュっと（ボタンを）押したら、すぐ目の前のフロントでジーンと非常用のベルが鳴っちゃうわけですね(笑)。で、エレベーターのボタンはどこかなァと思って探しても、それらしいものはないわけです。よく見ると手で閉めるんです。こうやってね(笑)。

それから今度、フランス語で二階というのは、日本の三階のことだ、と思って僕は三のボタンを押したわけです。それで三階まで上がって見たんですが、どこに行っても十八号室がないんです。着いたばかりですからね、非常に慌てちゃいましてね。まてよ、フランス語で三階ということは、日本で四階のことだったかな。いろいろ考えて今度は四階に上がるわけです。四階に上がってもないわけですよ、全然どこにも。いや、へんだなァ。もう一回、三階の見間違いかと思って、三階にくるわけです。やはりない。聞き違えたかなと思って、おばさんにもう一度聞こうとして降りていって、ひょっと見たら、したら二階にちゃんとやっぱり十八号室があるわけですよ。なんのことはない。おばさんが二階だってフランス語でいってるんだから、フランス語で「2」を押せば、フラ

ンス語も日本語も「2」は同じですからね(笑)。だから「2」を押せばよかったのを、たまたまちょっとした知識があるばかりに、教養が邪魔して、そういう結果になるわけです(笑)。

そんなんで、やっと見付けたでしょ。で、鍵入れたけど開かないんですよ。へんだなァ、聞き違ったかな。確か十八号室だといってたのにと思っていると、そのうち中から話し声が聞えてくるわけです(笑)。あれ、誰か間違えて先きに俺の室へ入っちゃったかな、といろいろ考えるわけですね。よく見たら、そこ十六号って書いてるわけですよ(笑)。僕の室十八号なんですね。そんだけ慌食ってるんです。もちろん、知らない土地へ来たということもありますけども、しかし、その後も似たようなことは続きましたね。今から考えるとおかしなことばっかしです。これは何かというと、僕の中にあったヨーロッパ礼讃なんです。礼讃の考え方なんです。だから、フランス革命と秩父事件とは同じなんだよなんていわれても、自分でそういい聞かせても、やっぱしそれはまだまだ拭い去れるものではないんです。

二　民衆の欧米憧憬

だいたい日本のこのモダニズムというのは、現在でもですね、もういっぱいあります。

一番いい例が、テレビのコマーシャルです。テレビのコマーシャルで、外国人が出て来るのが非常に多い。まあ、フランス語で出て来るのも最近多いですね。例えば、ボンジュール、目・目サン

というのもそうですしね。僕が着ているのも、たまたまダーバンだったんですけども、ダーバン、セ・レレガンス・ドゥ・ラ・モデルヌでアラン・ドロンですから(笑)。もう本当にいっぱいあります。車のコマーシャルで、日本人が出て来ても、セ・シャルマン？　ウィ、セ・シャルマンというのがありますね。自動車の。ああいうんだってみんなそうです。英語のはもっと多いですけど。とにかく非常に多い。なして多いか、というと、これは日本民衆が持っている欧米への憧れをですね、それを擽ってるんです。擽って、そのスマートさだとか、そこにあるバラ色の世界のような感じの、そういうものをドンドン与えて買わせるわけです。

美人のパターンというのは、何となく欧米的なのがいいと。僕なんかなんぼ頑張ってもそうならないんですけども。顔の化粧の仕方も、そういう恰好になるわけです。ほりを深く見せるとかね、今年は目を強調するとか、いろんなことがあるわけです(笑)。だから、そういうやつの出発点というのは、全部欧米なんです。フランスなんていうのは文化の国ですから。ファッションの出発点ですからね。とにかくそういうことになってますから、だからそういうのも相当出てくるわけです。

だけども、民衆には、本当はモダニズムなんかなかったんです。秩父の民衆が実際起ち上がるときに、「親不孝者め」といって天兵に立ち向って行くんですから、説得するんですからね。だからそんなモダニズムなんかないわけですよ。天賦人権説、そんなもの関係ないんです。もちろんそういうものも勉強しましたよ、たくさんの人が。しかしそれで理解したんじゃないんです。本当に理解したのは、自分の言葉で、自分の生活で理解したんです。だから、今、日本の民衆の中にあるそういうモダニズムというのは、支配者や知識人によって全部植え付けられたもんなんです、全部。それは一番最初にですね、欧米の文明と交渉し、欧米の文明を自分の中にとり入れた、そういう知識人とか支配者達とかが民衆と自分たちとをはっきりと文化的に区別するために、差別するために、まず俺たちは欧米流の文化をとり入れたぞ、先進的な欧米的な文化をとり入れたぞ、ということです。

日本の、明治以降現在までの政策というのはすべて欧米に追い付け追い越せです。戦前は軍事的意味を露骨に表わしてきたわけです、富国強兵ですから。ところが戦後になると、強兵というのは隠蔽しながらも表に出してきたのは富国です。経済成長です。高度経済成長でもってボンボン煽ってですね、ついにヨーロッパを抜いたわけです。これは明治以来一貫して同じことです。井出さんは昨日、昭和二十年というのが初め分かれ目になっていると思ったけども、最近はそうでもないように思ってきた、といってますけど僕もその点では基本的に変ってないところが多いと本当に思っています。ですから戦後は強兵を隠蔽しながら富国が進められ、もちろん強兵も進められてきた。そういう事実というのははっきりとあるわけです。支配者がとってきた一貫した政策だったわけです。

で、知識人も又一貫して明治以来今もなおかついってるのは、日本人というのは自我ができてない、と。近代的自我がなかったと。日本人にはなかったと。けどヨーロッパ人にはみんなあった。みんな自分を解放したんだ。自我というものにめざめたんだ。そういうふうにとらえてきたわけで

す。なぜ自分を解放できなかったか。日本には共同体があったからだ。大塚久雄とか丸山真男なんかずっといい続けて、今でもいってるわけでしょ。そういう考え方が支配的になってるわけです。今日本で、まだまだ支配的なわけです。

権威に弱い民衆が欧米に憧れるのは、つまりは、こういう理由があるからなんです。

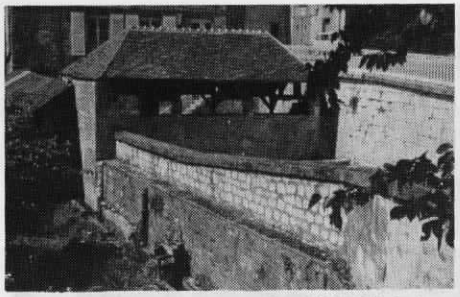
三　フランス民衆の実像

ところが、僕はフランスへ行って見て、実際に行って見て分かったことは、日本人ほど個々人がバラバラになってる国はないな、と思ったです。フランスの方がいっぱい共同体が残ってるなと。僕はフランスへ行ってどういうことをやったかといいますと、人口三万人位の小さな田舎町に根拠地をおきまして、そこが僕の調べようとした歴史的な所で、パリ・コミューンとは別な意味でもっともっと古い時代にコミューン蜂起があって、それを調べるために行った町なんですが、そこに根拠地をおきまして、周りの農村や別な町を、あるときは自転車で、あるときは一日三〇キロ、二〇キロと足で歩いていろんな人と交わってみました。

そしたらですね、僕らなんか共同井戸なんか使ってないでしょう、ほとんど。僕なんか北海道でもこの近辺でもあっちこっち農村地帯を歩いてるつもりなんですけども、まず共同井戸を使ってるというのはほとんどありません。しかしフランスでは、まだまだ奥の方へ行きますと共同の井戸を

使っています。

それから日本では電気洗濯機が相当普及してるでしょ。だけど向こうじゃ洗濯機の普及率は、日本よりはるかに低いです。で、手洗いします。そればかりじゃないんです。共同洗濯場というのが町の真ん中にドカンとあるんです。昔から泉の涌く所に共同洗濯場というのが建てられて、そこでもってやるんです。中部フランスから南フランスの方へ行きますと、まだまだおばさんたちが、こんなにいっぱいシーツとか何とかを抱えて、そこへ行って洗濯してくるんですよ。それから、僅かですけども共同地というのが残ってます。



Ⅱ－7　フランス田舎町の共同洗濯場兼家畜の水飼場（北仏ラン）

それからですね、僕はフランスというのは個人が確立してるから、個人主義が徹底してるから、祭りなんてたいしたことないだろうと思ってたんです。それで、僕の美唄の町のお祭りの夜店の写真をいっぱい撮って、向こうの人に見せてやろうと思ったんです。で、見せたんです、いろんな人に。そしたらなんも全然珍らしがんないですね。初めのうち、その理由が分からなかった。こんな日本的伝統のものをどうして分かんないんだ、と思ったです。個人が確立してるこの国ではこういうことも理解できなくなったのか、と思ったわけです。

Ⅱ－8　フランスの週市の伝統はいまも生き生きと続いている。人口8,500の町。

ところがなんと、フランスにはものすごくお祭りが多いんです。僕は日本人ほど、まあ色川さんもそういってますからね、日本人はお祭りの好きな民族だ、なんていってますから、僕もそうだと信じてたんですよ。そしたらフランスではどんな小さな村でもですね、年に四、五回はお祭りをやります。僕のいた人口三万の町でも五回位あります。

その他にですね、「市」が立ちます。「市」の伝統が今でもずっと続いています。

毎週同じ日の午前中にですね、町に何百軒という露店が並ぶんです。その露店というのは日常品ばかりです。それこそ日本でいえば、三百円均一のものばかり置いてるとかね、それから毛皮のコートの果てまで置いてる所もあります。食料品なんかでも、兎ですと生きたまま売ってます。食用ですけどね。それから衣類関係。まあ、ありとあらゆるものをそこで売っていて、デパートがいきなりそこにできるみたいです。それが毎週決まったときに開かれるんです。その時には、近くの市が開かれない村から、開かれた村へその日だけは集まってくるんです。日

本のデパートというのはいわゆる独占資本でしょ。それから名店街というのは独占資本の真似しただけでしょ、形体を。デパート風にしてね。だけれども、「市」というのは違うわけです。しかも日用品売ってるんですから。特別なものを売ってるわけじゃないんですから。それぞれの店が、その空の下で店ひろげて売ってるわけですからね。で、こういうのが行なわれているわけです。

四　民衆の「個」と「共同体」

それから人と人との親しいこと。

僕なんか行っても、顔立が明らかに日本人というか東洋人なんですけども、かならず声をかけます、田舎ですと。パリなんて、都会はどこでも同じですけど。田舎へ行くとどこでも気安く声をかけます。ボンジュール、ボンジュール・ムッシュ、こうやりますけどね。僕もすぐこたえてやります。こんな小さな子供でもやります。

で、道歩いてるでしょ、古い石畳の。たとえば車でも、直さないんです、全然。日本ならすぐ直して、焼付けかなんかしてパッとやるんですけど、そうしないでそのまんまでいつまでも使ってますね。それでいてかなりの美人の人が乗ってたりなんかしてね。本当に個人主義なんだろうかなんだろうか分からなくなる事がいっぱいあるんですけども。まあ、物を大事に使いますね、最後の最後まで。

ともかく、人に対する愛着もすごいもんです。道歩いてますとね、突然屋根の上からというか、二階の窓から呶鳴られているみたいなときがあるんです。お前どこ歩いてんだ！早口でいってるからなにをいってるか分からないわけです。多分そういったんでないかな、いわれたんでないかなァと思って、ハッとして上を見るわけです。そしたら僕の方を見てるわけじゃないんです。目線が違うわけです。道路を挟んで、一階の下にいる人にしゃべってるんですね。でっかい声で、なにか、あんた洗濯物しまったかい、とか何んとかいってんのかも知れません。なにをいってるのか、そのときは全然聞こえなかったんですから。

そんなことだとか、最近だったら、恋人同士で連れだって歩くときに、まず弟だとか妹だとかあまり連れていかないでしょ。二人だけで行くときには。僕等の小さいときはあったですよ。僕は姉が恋人と出かけるときは、いつでもなぜか付いて行ったですね。邪魔になるなんて考えなかったです。向こうもあんまり邪魔だと思ってなかったですね。それでて、向こうの連中というのは、弟がいようと誰がいようと、これは習慣の違いであって、何も進歩的だとか何とか関係のないことですけれど、どこでもチュッチュします。これは習慣の違いであって、なにも進んでるとかそんなことじゃないんです。愛情の表現の仕方の違いですからね。

だけども僕は悔しかったですけどね。ひとりだったですから(笑)。だいたい連鎖反応起こすんですから。道を歩いてるでしょ。前の二人連れが突然立ち止って、向い合って抱擁するわけです。そうすると、五メートル位後を歩いてる二人連れも連鎖反応を起こして立ち止まるわけです。その後

から僕はひとりで行くんですからね(笑)。だから非常に辛いですけども。

そういう時にですね、小さい子供がいたりするんです。男の子や女の子が。それでも知らん顔してるんです。これはやっぱり習慣の違いでしょう。慣らされているんでしょ。

そういうことはあります。しかし基本的な日常生活の中で見ていくと、日本の方がずっと個々人がバラバラにされてしまっているけれども、バラバラにされて日常的な交流でも、見知らぬ人に声をかけてみたりなんかすることはなくなってしまってるけど、しかし、フランスなんかはもっともっと人と人とのつながりが強い。その強さというのは、僕の小さいころ炭鉱で過したですね、あのときの人のまじわりと似てるんです。例えば漬け物を漬けたら、どこの家でも漬けるんですけども、漬けたらすぐ、「ちょっと、ねェさん、うちの美味しくないけど食べてみてや」、なんて持って行って勝手に上り込んで、うまくできたね、とかお互いの愚痴をいったりね、そんなことするわけです。

Ⅱ－9　炭鉱長屋の共同便所と共同水道（三菱美唄）

それが毎日、日常的な生活です。

共同水道でもって米を研ぎに来ては、人の噂さ話をして、人の噂さ話をしますけども、それは大事な社交場なんです。家に閉じ込められている者の、そういう「場」であったんです。

それから僕らのとこは共同便所なんです。炭鉱のときは。八軒長屋が二つ並んでいて、十六軒のとこ

ろに一箇だけ便所があるだけですから。でかい方するのに四ケ所あって、あとは屏も何にもないただ長い、いつでもアンモニアのムーンとして目も痛くなるような鼻も痛くなるような(笑)、まずそういう所なんです。ですからそこではしないんです、外でするんです。下水でもどこでもいいから、小便ぐらいならするんです。まあ、そんな便所でしょ。だから便所に入って、オイどうだ、なんて便所の中どうしでしゃべってるんです、皆んな。

僕らの炭鉱あたりは、そんなことしてても別になんてことはなかった。なしてかというと、炭鉱の人は、最初にもいったように、失うべきものは失ってるんです。カッコ付けてみたところですぐバレるんです。だから赤裸々にならざるを得ないんです。例えば自分が噂されてるとするでしょ。そんなことといちいち気にしてたら生きていけないんですよ。だから、つらっとして歩いてるんです。そのうちに人の噂もなんとやらで、まもなく消えていく。で、今度は一緒になって他人の噂したりするんですね。だから、噂するのが良いとか悪いとかいうんじゃなくて、それだけ人間の交流が非常に濃くあったわけですよ。知らない人にでも「今日は」としゃべったわけです。

それから、大人がものすごく遊びました、昔の人は。遊びは博打とか喧嘩も多かったけども、四十、五十の大人がとっくみ合いの喧嘩をよくしました。出刃庖丁で切られてるとか、そんなのいっぱいありました。

で、そういう喧嘩というのは、日常的な交流が濃いからなんです。フランスでとっくみ合いの喧嘩は見なかったですけども、フランス人というのはその辺の交流が濃過ぎてですね、ものすごい口

論します。「何んだ、てめェ。こないだ貸した千円返せ!」なんて、そんな感じの喧嘩してますね。

そうかと思うと、話してるときというのは実に和気靄々と、もう和気靄々どころでなく、本当に五十歳くらいの男が三人位集まると、かしましいどころか、「いや、こないだなあ」、なんて調子でしゃべり始めると、みんなでもって、でっかい声で笑って肩叩いてうずくまって笑うんです。日本なら、いい歳してなんてなるでしょ(笑)。しかし僕らの炭鉱のときには、自分の感情なりを、例えば面白くて笑うときには思い切って笑ってたみたいですね、怒るときには思い切って怒ってたみたいです。

ところが、このごろ分別臭くなっちゃって、その分別臭くなったことと、モダニズムとは大いに関係があるのではないか。ヨーロッパの人間はこんなはしたないことはしないんじゃないか。個人主義とはそんなもんじゃないんじゃないだろうか、なんていうことになるわけです。

結局、ヨーロッパ人の顔が美人だ、ハンサムだ、だからなんとなくその顔にならないと美人やハンサムにならないんだ、という考え方と、それからヨーロッパ流の考え方をもたないと、本当の個人主義的人間になれない、人間としての解放がされない、なんていってきた考え方とは基本的に同じなんですね、これは。

ヨーロッパの教養を身に付けたからといって威張り散らす。ヨーロッパ人に近いからといって、俺はハンサムだ、私は美人だ、といって喜んでいる民衆の姿。これは基本的に同じだと思います。けども民衆は、そんなこと知らなかったんです。しかし独特の美意識といいますか、何か必ず見

出していたはずなんです。だけども、ヨーロッパ流の知識を持っているものが進んでる。ヨーロッパこそ進んでる。だから日本でも、ヨーロッパ流の知識を持った者や、ヨーロッパを知ってる奴が、なんとなく偉い顔をして、でっかい顔をして日本を支配してきた。文化的な意味でも政治的な意味でも。

だからその影響下にあったものは、欧米的にならなければ人間でないんだ、ということになって、家の建て方から何からですね、個人主義的になったんです。無駄のない団地型の建物がいっぱい増えていったりですね。

そうそう、関西へ来て僕はビックリしましたけれども、文化住宅っていう言葉がありますね。文化住宅。僕はこれはどんな住宅かと思ったら、なにかそういう住宅なんだそうですね(笑)。だからこれが文化的だと思って、なにか進んだもんだと思ってるわけですよ。そんなことないですよ。やっぱり人間の生活っていうのは、無駄がなけりゃいけないと同じように、家だってできれば無駄がなけりゃだめなんですよ。そういう無駄があって初めて余裕ができますでしょ。

五、共同体の自己変革

一　秩父困民党と共同体

時間もだいぶ経っちゃって、こんなにしゃべっちゃだめなんですけども、まだまだいろんなことを本当は、……秩父事件でしたね本当は(笑)。

僕は、まあ、いろいろいいたかったんですけども、秩父事件の共同体というのは、これは村の共同体には違いないんですけども、ひとつ気を付けなければならないことは、秩父困民党というのは、村の共同体そのものでないということです。これは歴史的にどこの国でもそうです。フランスでもそうです。闘いが、村の百姓一揆が起こるときというのは、村人が全員参加するわけじゃありません、フランスでも日本でも。日本でも百姓一揆のときからあります。起ち百姓・寝百姓という言葉

があります。起ち百姓というのは、一揆に起ち上がる人です。それから寝百姓というのは日和ってる奴です。秩父事件のときもたくさんいます、これは。

つまり秩父事件の時の共同体というのは二重に現われます。

ひとつは困民党にオルグされていった連中。それから片方は、権力側に奉仕するために、まあ自警団とか自衛隊というふうなものを作って、困民党の鎮圧に、自分達の仲間を鎮圧するために権力に手を貸す。そういう共同体も現われます。ですから、共同体があれば、その共同体がそのまま蜂起に参加していったのではないということですね。でなかったら、大野苗吉が抜刀して、「お前、天朝さまと戦うんだから、敵対するんだから加勢しろ。しないとぶった斬るぞ」、といってオルグしに行かないですよ。そうやってオルグしていった。だから全村が参加した所もある。しかしその参加率が非常に悪い所もある。これは何かというと、共同体がそのままいった、ということではないということです。

だけれども次にだいじなことは、一旦そうやって集まって来た、新しく組織されていった困民党の人間的なつながりというのは、まさに共同体的なんです。

例えば、井上伝蔵なんていうのは困民じゃないんです。ないけれども幹部に置かれるんです。依頼されて幹部になるんです。もっとひどいのは、全然関係のなかった、関係ないことないんですけども、直接触れ合いのなかった田代栄助というのを連れて来ます。これはヤクザの親分ですから。だからヤクザの親分をポンと連れて来る。これは何かというと、やっぱり義理人情なんですよ。自

分達とは関係ないけども、自分達では統率できないから、誰か偉そうな人を連れて来てキャップにするわけです。井上伝蔵もそうです。なにも自分達の中から、ちゃんと選んでいったんじゃないんです。思考方法としては、旧来の共同体的な権威に弱いところをそのまま示してるんです。ほかにも例えば加藤織平と落合寅市というのはバクチ仲間の親分子分です。こういうのはたくさんあります。あるいはオルグされていく過程で、昔の講ですね、無尽講だとかいろいろあります。ああいう講の組織を媒介にしてオルグされていくこともあります。そうなりますと、ヤクザの、今のヤクザと全然違いますけど、そういう仁侠の世界の、仁侠的要素だとか、義理人情だとか、そういうものを絆にして人間関係ができ上がっているわけです。

だけれども、秩父事件のだいじなところは、実際に武装蜂起して進んでいく内に、やっぱりそれではだめだということに気付いていくところです、それだけじゃだめなんだと。連れて来たはずの、田代栄助、それから井上伝蔵。困民でもないのにキャップにした井上伝蔵。そういうキャップにした奴らが逃げちゃうんです。逃げちゃった、そしたらあいつら信じられない、俺らが体張って戦ってるのに、今戦ってる最中だっていうのに奴ら逃げやがった。すると、そういう中から困民はですね、困民は新しい自分達の指導者を生み出していくわけです。そうやって生み出されていったのが、菊池貫平なんかであるわけです。もちろん参謀長ですから、早くから偉かったですが、本当の指導者というものをその中で見抜いていくわけです。そうなっていって組織というものも新たな形態を採っていくわけです。ですから初めからきちっとですね、指導体系ができてるわけじゃありません。

もちろん初めのうち、菊池貫平あたりがきちんと軍律五ケ条というのを出します。金銭を欲しいままにする奴は斬るとか、女色を犯す奴は斬る、つまり女に手を出す奴は斬ると、死刑だと。それから、高利貸の所で借りて来た金を自分のために使った奴は死刑だとか。非常に厳しい軍律が出されます。だけども、結局、これを破ったのは井上伝蔵であり、田代だったんです。持って逃げたんです、金を。だから結局のところ、困民党の内部で、あいつらは信じられない、だから俺らはあいつらみたいなのでなく最後の最後まで闘う指導者を、といって自然に作っていくわけです。そうなってくると義理人情ですまされないわけです。そこで義理人情じゃない、別の抵抗の組織というのが、より高い組織というのができ上がっていった。それはしかし、でき上がってまもなく軍隊が出動し

Ⅱ—10　軍律を読みあげる菊池貫平
（戸井昌造画文集『秩父』より）

て、昨日も井出さんもいってましたけど、最終的にはメッタメッタに潰されてしまう。けどそういう中にも、ひとつの可能性、近代の可能性というのはもちろんあるわけです。

しかもその中で、個々人の活躍というのは、例えば血の気の多い大野苗吉だとか、あるいは井上伝蔵なんていうのは、聡明にしてちょっとひ弱ですね。菊池貫平というのは頭が良くて、非常に眼力もきくと。それに肝っ玉も坐ってる。坂本宗作というのも血の気が多い。いろいろなさまざまな個性というのがこの中で発揮されて、結集されて、困民党は蜂起を進めているんです。井上幸治先生の『秩父事件』を、まだ読んでない方が居られたら是非読んでみてください。そこの中に、さまざまな人間が出てくることがわかります。さまざまな個性が、つまり先程いった、義理だとか人情だとか仁侠だとか、いろんなもんで結ばれている旧い型の共同体と共存しているということなんです。なにもこれは矛盾していないということです。だから、現代の課題ということでいいますと、（時計を見ながら）もっともっといろいろあるんですけども、もう相当時間が経っちゃったですから。

本当は僕は何をいおうと思ったかというとですね、今日は九つぐらいのことについていおうと思ったんです。小さな項目ですが、知識人と民衆の関係、それから都会と田舎といいますか、中央と地方の関係ですね。それから西欧文化と日本の民衆の問題、建前と本音の問題、憧れと現実の問題、日常と非日常の問題、それから、個人と共同体の問題、遊びと仕事の問題、保守と革新の問題。最底限このことについては、いろいろと触れようと思ったんです（笑）。なぜかというと、この問題が

全部秩父事件の中にあるからなんです。そしてこの問題は、僕の個人史の中にもあるんです。というのは、僕がそれを解決したとかいうんじゃないんですよ。僕の中にも常にある問題なんです。しかもこれは現代的な問題だと思うんです、ここにあるのは。今上げたことは。

で、そのことをですね、秩父事件と僕の歴史との関係で、ずっと展開しようと思ったんですけども、何せ横道にそれたらトントン行っちゃうし、結局何をいってるのか分からないことになっちゃいましたけども、一応これで終ります。

一九七五年十月二十九日